

アウトリーチでは、赴いたその場にドロップインを開設し、時にはテーマを決めてそれに沿った遊具が準備される。アウトリーチの予定表はドロップインの情報コーナーに置いてあり、手軽に手にして予定を知ることができる。Take a Break Today で始まるキャッチフレーズは、

あなたの地域のモービル・ストップ（巡回ひろば）に来てください。地域のリソースについて学び、ほかの親や子育てを助ける人たちに出会い、あなたの子どもと、歌や音楽でたくさんの遊びの機会を楽しみましょう。子どもは遊びを通して学んでいます。

### (3) ブリティッシュ・コロンビア州

①バンクーバーのイーストサイド・ファミリープレイスのドロップイン・プログラムには、中国からの移民が多いこの地域を反映して、ヘッドスタート的プレ幼稚園のようなプログラムが組まれている。パンフレットには

・0歳から6歳の子どもと親、ケアギバー（保育者）のためのプログラムで、親教育、子どもの活動、イベントその他たくさんの情報（資源）を提供している

・子どもが学び、分ち合い、うちとけて友達を作り、そして楽しめるように、と前書きされて、一日のスケジュールが表に細かく記されている。

たとえば、週3日半日開設日は、朝9時から12時の間が細かいスケジュールとなっている。自由あそび（アート・クラフト；粘土、パズル、お絵描きなど）、おやつ前の片づけ、手洗、おやつタイム（健康的なスナックを持参し分け合いましょう、とある）。サークルタイム前の片づけ、歌とサークルタイム、体操やリズム（もし参加したければ、どうぞお子さんと仲間になってください）と続き、終わりの会で終わっている。

週2日の一日開設日は、午前中同じようなスケジュールで、ランチの後に、自由なあそびとストーリー・タイム、終わり

の会前の片付けがあって終わりの会の後、4時に終了となる。

予定表は月間で組み込まれ、小遠足や夏季キャンプ等も行われる。移民の多いこのドロップインでは細かなスケジュールを組んで参加者に分かりやすく示しているが、見学時の様子では内容に強制的な指導はみられない。

教材にはかなり工夫があり、英語と中国語を組み合わせて、識字教育が随所に組み込まれている。また生活指導、食生活の指導や親プログラムが別途作られて、提供されている。

付き添いの親や祖父母へのアプローチもあって、子どもたちを待つ間、別室でおしゃべりをしたり、趣味の作業を行っていた。他の多くのセンターとは異なってこのセンターでは、地域の移民たちが必要とする、親と子ども双方への生活指導を行うという地域性があることが理解できる。

②子ども預かり（child-minding）も行っており、月曜から金曜の午前中、1時間5ドルから6ドルで、1歳半から5歳までが対象となる。諸般の事情から週2回までの利用となっている。

### (4) 人権尊重のプログラム

カナダは連邦国家であるが、行政の中心は州政府であり、州によって行政のあり方が異なる。各州のファミリー・リソースプログラムは独自性をもって住民のニーズを尊重しながら進められている。ドロップインのプログラムを通して各地・各所による内容の違いを知った。

しかしながらその精神はカナダの家族支援の根底にある市民一人ひとりの人権の尊重があることを理解しなければならない。家族支援を掲げるファミリー・リソースプログラムが、地域のニーズに応え、親や家族にも多様なプログラムを提供することで地域に貢献し、子どもを育てる環境を作っていることを理解することができる。

### Ⅲ 1.

#### 3) 親の学習プログラム「ノーバディズ・パーフェクト」の理念と手法

「ノーバディズ・パーフェクト・完璧な人はいない」のタイトルを持つカナダのプログラムは、1980年代、カナダの東海岸の4州の保健機関が共同開発し、連邦政府が1987年に作った5冊のテキストとともに全国に広めたものである。

州ごとの取り組み方には違いがあるものの、全国で展開されて今も高い評価と予防的効果を上げている、親支援プログラムである。

##### (1) プログラムの対象と進行

カナダがプログラムの対象としたのは、0歳から就学前の乳幼児を持つ、若い親、ひとり親、経済的に貧しい親、地理的・社会的に孤立している親、十分な教育を受けていない親など、何らかの課題を抱えている親である。すでに深刻な状態に陥った親については、別のプログラムやケアを受けた後に参加することが勧められる。つまりグレーゾーンで、ある程度の健康度を保っている親が対象となっている。親をだめ親としないでその力を信じ、親同士が知恵を出し合って、支えあうことで親としての自信をつけていこうとするものである。

このプログラムへの参加は本人の意思による。案内のパンフレットや説明書は、親が立ち寄りそうなあらゆるところにおいてある。ファシリテーターが誘いをかけて参加を促すこともある。託児つきで参加者中心で話し合うメリットが伝えられ、通うためのバス券を支給されることもある。保健所やファミリー・リソースセンターが会場になることが多い。オンタリオ州では保健師がトレーナーとして訓練され、実践ファシリテーターを養成して、プログラムが実施されている。

グループでの話し合いが主で、参加者8人から10人で行うことが多い。2時間ほどのセッションを6回から8回行うが、

必要に応じて回数を延長することもある。これまでのような専門家がその専門性を伝える指導型の学習ではなく、お互いが持つ経験やアイデアを分かち合うことを大切にし、親一人ひとりには最良の判断を下せるだけの力を本来持っているとした親への信頼と、人間肯定的な理念を前提としている。

##### (2) 5冊のテキストと『父親』

連邦政府のテキストは『からだ』『安全』『こころ』『行動』『親』のシリーズであるが、これに連動してブリティッシュコロンビアの父親たちが1995年に作った『父親』がある。

誰にでも分かりやすい簡潔な文と、見ただけで何が書いてあるかが理解できるイラストが多用されて、子どもと一緒に楽しみながら学べそうな5冊である。たくさんの人種、父親、車椅子の母親、障害を持った子どもも登場して、人権への配慮、ジェンダーフリーのメッセージがさりげなく盛り込まれている。

『からだ』には乳幼児の一般的な病気についての症状と対応法が具体的に書いてあり、自分の判断を信じることと、「専門家の援助が必要なときはどういうときか」がはっきりと書かれている。『安全』には子どもの年齢による安全対策が示され、生活場面での具体的な危険が子どもにも分かるように描かれている。

『こころ』には子どもの発達を示され、子どもが、安全で安心できて、愛されていると感じることによって、発達し、人を愛するようになるのだとして「そのために親にできること」が示されている。

『行動』は、親を悩ませる子どもの行動がテーマで、よくある問題の原因と対応するために親にできることが書かれている。それでもうまくいかない場合どうするか、についてもヒントが書いてある。

日本ではなかなか見られない、親自身の心のケアにもふれているのが『親』である。「親も人間です」「自分のために時間を使おう」などのメッセージは、親を

ほっとさせる。全体に押し付けがましくない。全冊に書かれている「完璧な人はいません。私たちにできるのは最善を尽くしただけです」「助けてといおう」などの言葉に、読んだ人は安心するという。『父親』では、父親の役割や責任を引き受けるにあたっての不安を軽くし、パートナーと協力して子育てのコツを見につけ、支援の制度や資源にも気づくように配慮された内容になっている。

これらのテキストは、保育者や支援者にもたくさんのヒントや情報を提供してくれる。誰にとっても子どもや子育てについて学べる魅力的な教材である。

### (3)プログラムの構成

#### ①ニーズ・インタビュー

参加者が決まったら、それぞれの関心事や取り上げて欲しいテーマを聞いておく。集まったテーマは分類して、各セッションのテーマとして配置しておく。テーマは子育てに限定しない、親自身のニーズに応えるものとする。自分たちが希望するテーマであるから参加意欲を高めることができる。

#### ②テーマの配置

同じメンバーでグループを進めていくので、グループは変化していく。はじめは緊張して遠慮がちだったメンバーは、互いを知り、遠慮がなくなってくる。活発にぶつかることも出てきて、混乱する時期もある。テーマの配置は、このグループの発達に配慮して決める。混乱期を過ぎると、メンバーがみんなで何かをしようとし始める安定期を迎え、終了後も地域で支えあえる関係を作っていく。これも、プログラムのねらいになっている。

#### ③アイスブレイカー

初めて出会った人たちであり緊張しているので、まずは知り合い、緊張をほぐすためのアイスブレイカーから始める。2回目以降も簡単なゲームや、楽しく緊張がほぐれるようなものから始めることが望ましい。難しいことでなく、皆の前で声をだすだけでも気が楽になって、参

加がスムーズになるような活動である。

#### ④決まりごと

会を進める上でもっとも大切なことは、安全な場の保障である。それぞれが課題を持ち、何らかの解決を求めて集まっている。プライバシーにふれること、深刻な問題が語られる可能性も大きい。この場で話されたことはここだけのことにする、ということをお初めに約束しておくことで、安心して本音で話しやすい。そのほか、皆に頼んでおきたいことを出しあうことで、さらに安心感と参加意欲が高まる。日本では、自分の言ったことを笑わないで欲しい、という要望が出やすい。

#### ⑤テーマの展開

2時間ほどのセッションで最も時間を使う、中心の活動である。途中お茶の時間をはさむことで、ほっとする機会を持つ。ファシリテーターが場を促進しながら進めるが、話し合いだけでなく、ロールプレイやワークを入れたり、必要な情報を持ち込むなど、テーマに即してよい学びができるように準備する。行き詰ったときなどにテキストを開くことで、新しい展開が得られたりする。家で一人になったときにもテキストが利用できるよう、使い方の練習にもなる。

話し合いを進めるには、後述のファシリテーションの技法を用いる。親同士が話しやすいように立ち会い、場を進める役を取るのがファシリテーターである。

#### ⑥要約とふりかえり

ふりかえりの時間を残して、ファシリテーターは出てきた話題を要約して伝える。話し合いの結論は出さない。話し合いの中から、何を取るかはそれぞれに任される。感じたこと、学び・得たこと、そして家で実行してみようと思うことについて、一人ひとりに語ってもらう。

単に感想を述べるだけでなく、自分が何を選び取ったか、参考にして実行してみたいことを言語化してもらう。自分の意思を認識し、表明することが大事なようだ。できた・できなかったは問わないが、次回にどうだったかを聞いてみるこ

とで、互いに考え直すことができる。

#### (4)ファシリテーション

このプログラムでは、ファシリテーションの技法を用いて乳幼児の親をサポートする。従来の専門家がその専門性を親たちに伝えていくという指導型ではなく、親を中心に据えた参加型の学習である。

ファシリテーターがこのグループの進行役であり、促進役を務める。

##### ①ファシリテーションのねらい

ファシリテーターは次のような場をつくる配慮をする。

- ・安全で信頼できる雰囲気をつくる
- ・参加者間に多様で豊かな相互作用を引き出す
- ・自己理解や親としての精神的成長を援助する
- ・参加者がグループの中で存在感を失わないように全体への配慮をする
- ・参加者がお互いにファシリテーターの役割が取れるようにする

こうしたセッションを繰り返すことによって、参加者は互いに持っている力と知恵を出し合い、自分自身を信頼する感覚を経験しながら、子育てに不可欠な知識や技能を学び、親としての自信を築いていくようになるのである。

##### ②価値観の尊重

人はこれまでの経験から、それぞれ独自の価値観を持っている。日ごろそれを意識することはなくても、子育てで行動や判断はこの価値観によって決定されている。プログラムはこの価値観を変えることを目的にはしていない。虐待や人権にかかわること以外は、互いの価値観を尊重することを基本としている。

自身の価値観を認められることによって親は自信を持ち、他人の価値観に耳を傾け、そこから学ぶ姿勢を持つことができ、互いの学び合いが生まれるのである。

##### ③ファシリテーターのあり方

i 参加者と常に対等な関係にあり、ともに学ぶ人である

ファシリテーターには参加者とは異なる役割、責任はあるが、親とともに在り、

ともに学ぶ人である。無意識にでも権威的な考えを持っていると、グループの相互作用を妨げる雰囲気を作ることになる。普段から自らの価値観を敏感に自覚していることが必要である。

ii 場の観察者であり、参加者でもある

参加者個人、グループの状況をつねに把握し、必要に応じて軌道修正をする。グループの一員として参加しながら、自分を含めた参加者を観察し、グループの感情に巻き込まれずに適切な判断をもって進めることが求められる。ファシリテーターは逆に被観察者でもあり、考え方や行動のモデルとして学習の対象にされやすいことを念頭におく必要がある。

iii 話す人ではなく、聴く人である

親が参加しやすく話しやすい場を作るために、よく聴くことに最もエネルギーを集中する。さまざまな考え方に、判断したりすぐに結果を求めたりせず、批判や評価もしないでいることで、親も自分で気づきを得られるようになる。

#### (5)兵庫県の実践

兵庫県「心のケア研究所」では、2001年度、虐待の1・2次予防の観点からこのプログラムに着目し、1カ所の健康福祉事務所においてモデル事業を実施、02年度には保健師に研修を行い県下7カ所で、03年度には全健康福祉事務所25カ所でこのプログラムを展開している。

Y健康事務所においては、低出生体重児の親に6回のセッションを行い、育児不安を軽減し、親が自信を持つことができ、円滑な親子関係の構築を支援できたという。また託児ボランティアに協力を依頼、子育て支援の地域ネットワークの強化につながった。参加者も地域の支援者との関係を継続できているという。

従来とは異なって個別の参加者の意思を十分に把握し、信頼関係を築いてその気持ちを引き出して支援する、この参加者中心の講座が行政の手によって行われ、効を奏したことに意義があると考えられる。

### III 1.

#### 4) 父親支援

カナダでは、一般的に残業のない労働、ジョブ・シェアリングが容易で多様な働き方を選びやすい。子育て中は夫婦が時間をずらして交代で働くことも多い。親の近くに住んで手を借りたり、また近所の友達と助け合うことも多いようだ。職住が比較的近いなどから、父親が育児に参加することが自然に行われている様子を見聞することも多い。普段の夕方でも、父子でゆっくりと公園の散歩などを楽しむ風景も目にする。父親と遊ぶ子どもたちは活発な遊びを展開し、誇らしげでもある。

##### (1) 子育て比較調査から

筆者らが1998年から99年にかけて行った日加比較研究において、カナダの親たちに目立ったことが、80%以上の親が子育てが楽しい、それもいつも楽しいことであった。その原因として考えられたのが、父親の帰宅時間の早さと一緒に遊ぶ時間の長さ、そして育児行動の多様さであり、日本とはかなりの有意差が見られたことである。普段の帰宅時間が6時以前のもものが33%、8時以降は5%にすぎないのに対し、日本の父親の51%が8時以降の帰宅となっている。子どもと遊ぶ時間がウィークデイで2時間以上が63%、5時間以上も30%に上る。日本は逆に2時間以内が87%で、そのうち25%は30分以内である。育児行動も絵本を読んだりお話を聞かせる、ボールや水遊びが83%以上、日本の父親がもっともやっているのが風呂に入れる、で75%であるがカナダでは81%がやっている。オムツ替えも大小便とも72%以上がやっているが、日本では小便でも49%に落ち込んでしまう。

##### (2) 病院の産前産後のプログラム

トロントで出産育児をした三宅光代さんの手記によると、90年半ば出産を間近

に控えた両親学級につづき、病院の産前体験学習ツアーに参加している。入院の時期、連絡の仕方、夫の立会い、分娩方法、母子同室など具体的な説明があり、夫婦で院内の見学をしたことで、初めての出産への不安を和らげられたという。

両親学級に夫と参加することで、自分だけで産むのではないという安心感を持ったという母親もいる。病院では両親を対象にこうした機会を提供するところが多く、産後のプログラムも充実している。父親だけのグループ、母乳を奨励する両親対象の学級をウィークデイの夜に開いている病院もある。外は暗いが、両親と赤ちゃんが広い部屋に何組もそろい、車座になってユーモラスな説明を聞く。時々楽しそうな笑い声上がる教室である。父親が加わる雰囲気からは、パワーと明るさが感じられる。

##### (3) 父親の育児休暇

2002年秋に来日したパット・ファノン氏からは、父親の育児休暇が義務化されたことにより、休暇を取る父親は80%以上になった、と聞かされている。そのせいか、親子が訪れるドロップインではウィークデイでも父子の姿を見ることが多くなった。父親自身がグループを作る動きやそれを支援するファミリー・リソースセンターの動きもある。さまざまな人種の父親が子どもと生活の中で、遊びや勉強などに自然にかかわる父子の姿を写したポスターには、温かで幸せな雰囲気があり、父親の育児についてさりげないメッセージを発信している。

日本で実績0.5%以下の男性の育児休暇の取得率を10%に上げるという目標値が示されたが、罰則も補助もない中でその効果はいかかなものだろうか。政府のやる気、企業の姿勢、働き方のシステム、男性自身の意識のあり方が問われるものであろう。10%という率も低いものであるが、男女共同参画のための大きな柱であるとしても、社会が本気で子ども育てることを引き受ける事態にならな

れば、父親の育児への参入は困難なまま、進んでいかないのではないかと、といった危惧が危惧で終わることを願いたい。

育児休暇をとりやすい環境を作る必要はもちろん、取る父親が増えるとして、またたとえ少なくとも、一時にせよ在宅で育児をする父親を支援する必要は出てくるのが考えられる。子どもと時間を共有することが楽しいという経験は、母親にももっともってもらいたいが、父親が育児を楽しむようになるには、並の努力では足りないのではないと思えるが、子育てをめぐる状況は、その努力を要する段階に来ていると思えてならない。

#### (4)カナダの文献に見る父親支援

移民でつくりあげたカナダの社会では、厳寒の地の開拓時代から、家族だけでなく互いによその国からやってきた近隣同士も、助け合わなければ生きていけない状況であったと思われる。また他民族が共存するという課題を抱えて、掲げた国策が多文化主義であって、差別をなくす努力は男女間にも適用されていたのではないかと推測される。

##### ① Nobody's Perfect(1987,1997) Fathers(1995)

カナダ政府によるこの親支援学習プログラムのテキストには、母親という言葉ではなく、親という言葉ですべてが表現されている。どんな人にもわかりやすく、絵を見ただけで内容が分かるように配慮されて、簡潔な言葉とたくさんのイラストで、多様な人種、障害をもった人も表現されている。子どもにかかわる父親も随所にごく自然に描かれている。

ブリティッシュコロンビアの父親たちは、このプログラムに参加するのが圧倒的に母親であることから、自分たちの居場所、自分たちのためのテキストとして、1995年にプログラムに連動した冊子『父親』を作っている。子どもは一人ひとりちがっている、父親も違って、こうあるべきとかこうあってはならないというリストはない、に始まり、ほとんどの

イラストが父子の姿を描いている。父親についての考えは十人十色、誰でも同意するのは父親は重要だということ、とある。あなたが子どもに与えられる最高の贈り物は、あなたの愛情と時間なのです、と続いている。

父親にとっては自信がなさそうな、子どもの健康と安全を守るための世話についてもふれている。親であることには責任が伴うことで、してはならないこともあると、父親が持ちやすい不満な状態について、その対応策が丁寧に書かれている。父親たちが書いた本であるので、押し付けがましくなく、受け入れやすい書き方になっている。

ストレスや怒りへの対応、パートナーとの関係、親権等法的な問題にもふれている。父親自身や家庭、パートナーとの関係など、セルフ・マネジメントについても学べそうな内容が盛り込まれている。

##### ② Supporting Fathers, Canadian Association of Family Resource Programs (2000)

ファミリー・リソースプログラム協会の手による、父親支援そのものをうたった8章にわたる力作である。

###### i 現代の父親の状況

一般社会において父親が「父親になること」には障壁があることが述べられている。子どもの頃母親に育てられた、もともと自信がなくすぐにめげる、母親のその役割を取られることに対する抵抗や周囲からも抵抗感があるなどの理由による。しかし父親の育児への参画は、子どもにも父親にとっても良いことが明らかになっている。早期であるほど父親になることがたやすいので、若い男性への支援が大切である。これまで社会や職場が父親が育児にかかわることを奨励しないで来たことや、父親自身が育てられたときの役割モデルとは異なる役割を選ぶ、選ばざるを得ない時代になって、父親になろうとする男性には困難が伴う時代であるともいえる。

### ii 父親支援にあたっての基本原則

- ・「男性」を彼の家族やコミュニティという文脈の中で捉える。父親はいろいろな個別的問題を抱えているが助けを求めず、悪い結果になりがち。
- ・会話を通じて関係をつける。問題を話してくれるまで時間がかかる。支援者にはグループをファシリテートするスキル向上、訓練が必要。
- ・父親支援をネットワークによって形成する。専門家に来てもらいニーズに合う話をしてもらったり、メリットになるものが得られるような機会にする。

### iii 支援の環境を整える

- ・職場や父親に働きかけ、支援の場にあたたかく歓迎する環境を作る。誘いかけても大事となる。
- ・プログラムに参加することで得られるメリットについて知らせる。父親仲間から学べる、情報が得られる、話を聞いてもらえる、助けってもらえる、などが伝えられることも必要だろう。
- ・父親をあたたかく歓迎する環境を作る。子どもと遊べる十分な空間、週末のプログラムや活動がある場所、父親向けの情報を掲示するなどの環境では、父親たちも語りやすい。

### iv プログラムの例として

- ・託児つきで夕食会をして話し合う
- ・出産前・産褥期の父親支援
- ・子育てスキルの向上、妻とのコミュニケーションなどの講座もよい
- ・父親自身の個人的な成長に役立つプログラムやそのPRも加わるとよい。

## ③Involved Fathers, Father

### Involvement Initiative / Ontario Network (2001)

父親の育児を推進したり学ぶために集まった、オンタリオ州の個人から多種多様な団体のネットワークの手による書。

以下に内容を紹介する。

複数の研究によれば、育児をする父親の子どもは貧困に陥る率が低い、学校でうまくやっけていける率が高い、両親と助

け合いの関係を持つ率が高い、ストレスで切れやすい母親を持つ率が低い等、子どもにとってよい結果が出ている。それは父親自身にとっても、子どもを育てることで得られる満足は何にも代えられないもので、もちろん自己尊厳を高めることにつながる。父親の育児は、健康に育ち逆境に耐えていく子どもを育てる。

これまでの父親像では、扶養する父、責任をとる父が強調されてきているが、この本によれば、それに加えて育てる父、対話する父、愛情あふれる父、子どもが一番の父であることを求めている。これまで父親には表現されてこなかった側面である。

育児をする父親になることは言うは易し、行うは難しいが努力することに価値がある。時間をかけて実践を重ねることで、経験豊かな親になれる。母親も父親に機会を与え、子どもの世話ができたと自信を持ってもらうことが大切。

子どもと一緒に過ごす時間を経験することこそ、子どもを理解する一番よい方法である。つながっていると感じることで、遊びでは子どものリードに任せること、しつけとは罰することではなく教えることである。育て方に影響するので、子どもの性質や自分自身の気分気づくこと、などが大切である。

子育てにはチームワークが要求される。やり方は違っても両親で負担を分け合うことは大事、少しでも貢献できる方法を探そう。子育てを共有することで、夫婦間の理解や尊重しあうきもちが深まる。

以上、内容を要約したが、日本の父親には耳の痛いことが多いのではないだろうか。子どもにかかわる前に、家族の一員としての自身をふりかえる必要がありそうである。こうした本を生み出すネットワークが機能していること自体が驚きでもある。

まず新しい父親像を、女性も含めて男性自身そして社会が構築していく必要を感じてしまうのは、筆者だけであろうか。

#### (5) 育児する父親の立場から

本節の最後に、カナダの文献の訳を担当した平野耕一氏の提言を加えておく。

##### ① 育児の主体に父親も加わることで、そして父親の役割モデルの再構築

遅くとも戦後の高度成長期に始まった現在の父親の役割モデル（女は育児、男は仕事に猛進）[3]の継続が、少子化や種々の深刻な家庭・青少年問題をもたらしているということは、近年多くの人々に指摘されるようになったし、父親の育児参画がもたらす子どもの発達への好影響についての数多くの海外の研究により裏打ちされている[1]。育児主体である母親の負担を軽減する援助者（いわゆる「協力的な旦那さんでいいわね」的な父親像）としてではなく、育児する主体としての父親の存在は、母-父-子の三項関係の中での発達（夫婦での子育て・親育て）を可能にし、子どもだけでなく父や母を含めた家族全体の健康と活力をもたらす（夫婦で楽しく育児）、ひいては近年の若年層の生きる力の低下に歯止めをかけるKeyと思われる。筆者は、成長し続ける日本を形成するための戦略課題の一つに、育児主体としての父親「育児するお父さん」の誕生があると考えている。

以上のような認識に立つと、現代のパパ達は、自分達の手で新しい父親の役割モデルを創らなければならないことになる。このモデルについてはカナダでの取り組みが参考になる[5]。パパたちにとって、父親役割モデルの再構築は、時には周囲との緊張をとまなう、大変な困難を伴う作業である[6]。「父親支援」はこの困難を低減する取り組みとしてとらえるべきである。

##### ② 「育児するお父さん」への道

ー「親」の誕生：父-子の関係からー

子の誕生は、それまで自分が子どもであった男性が父親になるという瞬間である。この時期に自分が「父親」として誕生したという認識を豊かに持つことは

「育児するお父さん」になる上で重要な土台の一つである。この文脈で、いかに早期に父-子間の感情的結合を形成しはじめるかが、その後の父子間の関係の豊かさを大きく左右するという研究報告・指摘は少なくない[2]。約10ヶ月胎児と共にいた母親ですら、出産直後から母子同室でいることがその後の母親の心理に大きな正の影響を与える[4]。母-子間のそれにくらべて軟弱な父-子間の感情的結合の接点を補うには、妊娠期を含む出産後の「母父子同室」状態を作ることが必要である[2]。ウンチの世話をする、泣き続ける赤ちゃんをあやすのに成功する、等の成功体験が父親の喜びと自信となり、「育児するお父さん」の礎となる。この観点からの周産期医療憲章が望まれる。

##### ③ 逆風に対抗する支援のポイント

現代のパパたちが「育児するお父さん」になることに対しての逆風を一つ一つ明らかにし、いかに追い風にすることを考えることが父親支援策立案のポイントである。以下、いくつかについて検討する。

##### ○ 夫婦子育てカウンセラー・エンカウンターグループ

周産期は、「夫婦で楽しく育児」する「育児するお父さん」とお母さんのスタートにとって重要な時期であり、この時期にサポートすることの重要性は、カナダでの子ども家庭支援の先進的実践家・研究者の間での共通認識となっている[6]。出産を前に、どのようなスタートを切るかを夫婦間で真面目に考え、率直に話し合い、多数の選択肢の中から自分達の出産や育児の形を選び考える機会を持つ事は重要である。まだ日本では夫婦間でこうした機会を持つ対等な人間関係力を持つ夫婦が少ないことから、この夫婦間の議論をファシリテートする第三者、言わば「夫婦子育てカウンセラー・エンカウンターグループ」のサポートが期待される。また、出産直後、夫婦に対し同様の継続的サポートが必要である。既存の機会とし

て、両親学級、妊婦検診、1ヶ月検診、出産後の保健師の家庭訪問、出生届の窓口などがある。

この時期の逆風の一つに、プレパパ・プレママの両親の父親の役割モデル(=母親モデル)の影響・場合によっては干渉がある。一つの端的な現象として、伝統的モデルに基づく里帰り出産を選択する母親が少なくないが、里帰り出産は多くの場合、「育児するお父さん」のスタートをうまく切れない要因になっている。この他、妻自身が父親から育児する機会を意識的に奪い、子どもを囲い込む傾向も「育児するお父さん」にとっては逆風で、パパ、ママ、あるいは夫婦一緒に相談できる「夫婦子育てカウンセラー」がその逆風を弱める役割を果たせる。

#### ○ 父親の参画を前提としたサービスの徹底

ほとんどの育児に関するサービスが母親向けを前提にしている(実際しばしばうんざりする)。父親のニーズが出てくるのが先だ、云々の、鶏が先か卵が先か的な非建設的議論を回避するために、全ての行政サービス・医療・教育を父親の参画を前提とした/期待した内容にする必要がある。例えば、学校の3者面接は教師・生徒・父・母の4者面接とし、父の出席を「期待」する、出生後の保健師家庭訪問も父親が参加できる日時に行う、等である。これらの変更は「育児は母親」モデルという常識への兆戦となり苦行である。厚生労働省が中心となって「育児するお父さんにフレンドリーなサービス自己チェックリストあるいは憲章」を作成すれば、サービス担当者レベルでの常識再考作業時の指針として大変役立つ。モデル自治体を作って推進するのもよい。

#### ○ 「育児するお父さんにやさしい企業」評価開始とペナルティ導入

男性の育児休暇取得要件の緩和、育児・教育(18歳までの子を対象)上の理由による休日制度、残業や出張の免除をはじめとする「育児するお父さんにやさ

しい」制度を導入しているかどうか、またそれら制度の浸透度を含めた評価リストを厚生労働省で作成し、経営団体、労働団体、企業に配布・説明し、まずは上場企業に毎年自己評価結果を公表させる等の取り組みも有効であろう。モデル企業を作って推進するのもよい。

「育児するお父さん」にやさしくない企業は、少子化への寄与、将来の優秀な人材の確保への負の寄与をしているという意味で、国の財政・社会保険制度を破壊しているといえる。これを理由とした、追徴課税、社会保険料企業負担分の増額等の措置の導入の検討開始を宣言することも「育児するお父さんにやさしい企業」育成の大きな力となろう。

#### ○最後に

「育児するお父さん」として筆者は、育児を通じた人間的幸せ・成長・自信と夫婦の強い絆を得た。しかし一方で、現時点で「育児するお父さん」であることは、職場・地域・血縁者・行政からの逆風による時に耐えがたいストレスにさらされるということでもある。今、まず切望することは、こうした体験を共有・理解し、共に解決の道を切り開くことのできる人材である。こうした人材なしでは本稿での議論は絵に描いた餅である。

#### 参考文献

- [1] 合衆国教育省 (2000). A Call to Commitment:Fathers' Involvement in Children' s Learning.
- [2] Greenberg, M. (1985). The Birth of a Father.
- [3] ある厚生労働省審議官 (2004). 私信.
- [4] Sears, W. & M. (2003). The Baby Book, Revised Edition.
- [5] Hoffman, J. (2001). Involved Fathers: A guide for today's dad.
- [6] Beauregard, B., Brown, F. (2000). Supporting Fathers.

### III 1.

#### 5) 赤ちゃんプログラム

子育て力は子ども時代からの体験や学習を積み重ねて身につくものであるが、家庭にも地域にも学習の場が少なくなっている。自分が親になるまで赤ちゃんに触れる機会がなかったという若い親たちも増えている。子育て支援を長期的展望でとらえると、いま子育て期にある親を支援するだけでなく、将来親になる、次世代の親を支援するという視点も重要である。カナダでは、こうした考え方を親になるための学習プログラムとして具体化して、学校教育のなかで積極的に取り組んで成果をあげている。

このプログラムの創始者、メアリー・ゴードンはトロント市インナーシティの公立小学校の中に地域に住む親子のためのペアレンティングセンターを設立した人である。インナーシティは多文化社会が抱える社会問題が凝集されているといわれる下町の地域で、犯罪、麻薬、未婚の母、ストリートチルドレンなどが多く、また学校でのおちこぼれの出現率も非常に高いところである。こうした問題を放置すれば社会的弱者を再生産することになる。そこで問題を次世代へ持ち越さないために就学前の子どもと親を支えるさまざまな実践がなされた。これらの活動を通してM・ゴードンは、子どもの学習意欲にもっとも関係深いのは親自身であり、親と子の愛と信頼であると確信する。そして人生のよいスタートをきることができなかつたり、十分に経験することができなかつたために共感性を育むことができなかつた子どもたちが、将来よりよく子育て力を発揮できる大人になるために、教育の場で行なうペアレンティングプログラムを考えだしたのである。

#### (1) 次世代の子育て力をつけるためのプログラム

ここで紹介するプログラムは「共感の根」(Roots of Empathy) と呼ばれる

もので、赤ちゃんのもつ豊かな感性を借りて、子どもたちの共感性を育むための学習プログラムである(筆者らは「共感教育」と名づけている)。1996年より、トロント市の公立学校(幼稚園から中学校まで)で授業の一環として実施されてきた。生徒たちは赤ちゃんをもつ親の協力をえて、教室で毎月1回、約10ヶ月間、同じ一人の赤ちゃんの成長過程と親子の愛情ある関わりにはじかにふれながら学習する。そして人間発達への理解、他者への共感性や思いやり、自尊感情、命への慈しみ、ひいては将来の子育ての力を身につけていくというものである。

#### ① 赤ちゃんとその親を教室に招く

授業の構成は、1クラス(20~20数名まで)につき、地域に住む一組の親と赤ちゃん、このプログラムの実践資格をもったインストラクター、クラス担任と生徒たちで構成される。かなめは赤ちゃんで、この授業がスタートする新学期の時点で生後2ヶ月~4ヶ月の赤ちゃんが選ばれる。それは赤ちゃんのクラス訪問の期間が人間の一生の中でもっとも急速な発達を遂げる時期にあたることによって、生徒たちが感動的に学ぶことができるからである。実際、学年末には「わたしたちの赤ちゃん」という親しみをこめて1歳の誕生日を祝うようになっている。対象の親子はペアレンティングセンターの利用者の中から該当月齢のカップルが選ばれることが多いようである。

障がいをもつ赤ちゃんを積極的に選んで病院と連携しながら授業をすすめていくこともある。生徒たちは親とともに、赤ちゃんの成長を喜び、障がいを自然に受け入れ見守るなかで、人権の意識を育んでいく。

また父親の協力が生徒たちに健康な父親モデルを示すために重視されている。参加する親の3割は父親である。

#### ② 年間27回の授業

プログラムは、3つの要素から構成される。第1はインストラクターによるプログラム開始前の家庭訪問である。親子

が安心できるように授業の内容について十分に話あい、

信頼関係を築くようにする。また初回の事前授業で生徒に見せるための写真を準備する。第2は親子によるクラス訪問で、毎月1回9ヶ月間継続される。第3がインストラクターのみによる事前・事後のクラス訪問で、毎月2回9ヶ月間実施される。生徒は総数27回の授業を受ける。

### ③カリキュラムの中心は赤ちゃん

カリキュラムの構成は、全学年に共通で、赤ちゃんの月齢による発達、行動、世話などについて学習できるように以下の9テーマが設定されている。

- ・ Meeting the Baby
- ・ Crying
- ・ Caring and Planning for the Baby
- ・ Emotion
- ・ Sleep
- ・ Safety
- ・ Communication
- ・ Who am I?
- ・ Goodbye and Good wishes

このカリキュラムに併せて、学齢により幼稚園・プライマリー(小学1年~3年)・ジュニア(小学4年~6年)・シニア(中学1年~2年)という4レベルの内容が用意されている。このプログラムは通常の授業の中に位置づけられているので授業計画の最初の段階からクラス担任との共同作業で進められ、他の教科のカリキュラムとの関連性を考慮したものが作成される。1回の時間は、幼稚園 25~30分、その他の学年は30~40分である。

### ④インストラクターの役割

インストラクターは、親子と生徒たちを繋ぐ橋渡し役である。親子の状況を的確に把握し臨機応変に対応しながら、生徒が赤ちゃんの行動や発達を深く理解できるように、からだの発達だけでなく、感情や親子の相互作用に着目して生徒の気づきを促す働きかけをする。事前・事後の授業では、親子訪問のある授業のなかで生徒たち全員が体験したことの意味を学びあい、また自分たちの体験に置き換えて赤ちゃんの感情をより深く、まさに共感的に理解させるようにする。

10ヶ月以上にわたって赤ちゃんや親子の関係にじかにふれる体験はそれ自体

でかなりの学習成果が期待できる。しかしそこにインストラクターが介在することによって、単に赤ちゃん理解にとどまらず、生徒自身の心の成長を促進するのである。このようにインストラクターの果たす役割は非常に大きく、またプログラムの理念、成果の質を維持するためにはかなりの力量が求められる。カナダでは通常、小学校や幼児教育の経験のある人が組織化されたトレーニングを受け、実践資格を取得してインストラクターとして授業を行なっている。

### ⑤思春期の子どもたちにとって

第2次性徴の出現によって始まる思春期は、急激な身体的、性的な成熟とそれに伴う自分自身の変化を受容しつつ新たに自己を築いていくという困難な課題を抱えた時期である。自己イメージを低下させたり、自分自身の拠って立つ基盤が揺らいでしまう子どもも多い。こうした時期に親にとってかけがえのない存在として大切に育てられていく赤ちゃんとの出会いは、それによって自分の幼少期の再体験をし、自分自身を肯定的に受容することを容易にするであろう。また性教育や妊娠、出産、育児などについての望ましい考え方を伝えるのにも役立つという直接的なメリットもある。

### (2)日本での試行的実践から

筆者らはカナダの子育て家庭支援の研究の一環として、小学校の空き教室を利用した親子のひろば・ペアレンティングセンターを訪問し、「共感の根」プログラムに出会い、次世代の養育性を育むという、子育て支援における予防的な観点に着眼して日本への導入を考えた。幸いにも1998年、M・ゴードンとトロント市教育委員会の招待によりインストラクター研修を受け、実践者資格を授与された。その後保育・教育現場への導入の可能性を探ったが、あまりにも体系的なプログラムであることや、特に年間、総授業数27回がネックとなり容易には実践に至らなかった。2002年度から総合的学習

が施行されることになり漸く、公立学校での実践の可能性がでてきたのである。

#### ①公立小学校での実践について

実践にあたって先ずはじめたことは、授業の構成メンバーの一人であるクラス担任の理解を得ることであった。その上で学校長、教育委員会の許可を得て実践の運びとなった。教育委員会からは、学習指導要領に基づくこと、総合的学習のねらいに沿うこと、生徒の保護者に周知すること等々に関して指導を受けた。

協力者である赤ちゃんへの安全や緊急時の対応として、赤ちゃんの学校訪問時には助産婦・保健師の同席（ボランティア）を設定した。カナダでは設定されていない。幼稚園、プライマリー、シニアの各クラスでの実践を見学したが親の方もそのことに不安を感じているようすは見られなかった。しかし日本で実践する場合、学校の危機管理もさることながら赤ちゃんの安全面、親の安心感を考えると十分な配慮が必要であり、保健師等の同席は有効であったとおもわれる。

協力親子は、赤ちゃんの体力などの点からもできるだけ近隣に居住していることが望ましく、学校設置市近辺での協力者を探し依頼した。

#### ②総合学習のなかで実践

試行段階にある総合的学習の一環として実践することになったが、時間的制約から全工程を実践することは難しいため、M・ゴードンの特別の許可をえてブリーフセッションを設定した。以下のように4テーマにしぼり、最終回に1歳の誕生会をみんなで祝うという、通算13回の授業を行なうこととした。

- ・「赤ちゃんとの初めての出会い」（生後3ヶ月）
- ・「泣く」（生後5ヶ月）
- ・「気持ち」（生後7ヶ月）
- ・わたしはだれ？」（生後10ヶ月）
- ・「お誕生日おめでとう」（生後12ヶ月）

実践校では対象児童が低学年のときに、保健の授業で赤ちゃん人形などを用いて自分の誕生や命に関しての学習を行なっ

ている。そのような学習をベースにこのプログラムは、総合的学習『命の大切さと自分の成長を知る』単元の中に位置づけられた。

#### ③小学5年生のクラスで実践

東京都東久留米市の公立小学校5年生、2クラスの児童55名を対象とした。高層の団地が立ち並ぶ地域にある小学校で、団地に住む世帯と代々地域に住む世帯の子どもたちである。共働き家庭の鍵っ子もおり、家庭環境はさまざまである。赤ちゃんは2組とも女兒、第一子と第二子で、いずれも母親の育休中の参加である。父親の参加は第一子の方に3回あった。

実践期間は、2001年6月より2002年3月までである。2003年3月、「共感の根」プログラムの終了1年後（6年生の卒業時）、2歳の赤ちゃんとの再会授業を行なった。

#### ④効果の測定方法について

実践によってどのような学習効果が得られるのかを客観的に把握するために以下に挙げるような方法をとった。これら作業を通して、自他への気づきを促進させたり、学びをより深化させることなどに留意して実施した。

- ・授業観察：毎回、ビデオ記録。
- ・共感性尺度：「赤ちゃん」「自分」「親」に関する自己評価を、開始時・終了時・2年時の3回。
- ・行動尺度：クラス担任による生徒の行動評価（カナダ版をベースに、担任との協議で作成）を、開始時・終了時・2年時の3回。
- ・学習アンケート：毎回のテーマ（ねらい）と関連づけた設問内容を担任と協働で作成（記述式）。
- ・生徒によるプログラム終了時の評価（カナダ版の質問紙と同じ）。
- ・クラス担任によるプログラム終了時の評価（カナダ版の質問紙と同じ）。
- ・生徒の保護者によるプログラム終了時の評価。
- ・赤ちゃんの親のヒヤリング記録。

#### ⑤実践の効果について

実践によって際だった変化をあげる。

#### i. 実践後のクラス状況の変化

5年生は思春期前期の難しい年頃である。対象クラスも自己主張の衝突から友だち間のトラブルが多く、暴力をふるう、罵り合うなど攻撃性のコントロールが難しい少数の子どもに振りまわされている状況が観察された（それが実践の理由でもあった）が、これらの行動が5回目頃から減少し始める。担任はクラスの雰囲気落ち着きや優しさを感じるようになったと評価している。実際、音楽の教師から“しっとりと歌えるようになった”と高く評価され、他の教科での学習態度も改善されるなど波及効果は大きい。

#### ii. 生徒の行動の変化

担任による「行動評価」をみると生徒たちの行動は、○自信が付き ○攻撃性が低くなり ○仲間意識が高まる ○共感性が高まるなどの傾向がつよまっている。しかも、これらの傾向は開始時から終了時、2年時へとさらにつよまっており、小学校高学年で培った共感的能力が学習時だけでなくその後も持続されるということが推察される。

#### iii. 「自分」「親」への意識の変化

それでは生徒自身による「自己評価」はどのような変化をするのか。赤ちゃんが好きだ、もっと知りたい、抱いてみたい…など、「赤ちゃん」に関しては、元々肯定的評価が高いので大きな変化はみられない。一方、自分が好きだ、たよられていると思う、自分をやさしいと思う…など、「自分」に関しては、授業回数を重ねる毎に高くなり、自己肯定感がよくなっていくことが窺える。「親」への関心も総じて肯定的評価が高くなる。「赤ちゃん」や「自分」に対して変化の少ない子どもでも「親」に対する認知の変化がみられる。自己肯定感をもつことで、親は自分の言い分をよくきいてくれる…など親とのコミュニケーションが変化してきている。

自分にとって大切なものはなにかという設問に対して上位にあがったものは、

○家族(ないと生きていけない)(64,3%)  
○友だち(53,6%) ○お金(78,6%)  
○命・自分(生きているあかし)(82,1%)  
○気持ち、たましい(人や自分の気持ち)(50,0%) ○食料・水・飲み物(100%)  
○衣服(36,7%) ○からだ(71,4%)  
…などである。(複数回答)

自分をつくっているもの、家族や命の大切さ、いま自分自身があることの意味に心を向けていることがわかる。

保護者アンケートによると、全ての家庭でこの授業について子どもと話し合いがあり(82,6%は毎回)、自分の小さい頃のことや教室にくる赤ちゃんの成長ぶりが話題になっている。親は“子どもの気持ちが優しくなった” “対話が増えた”などを高く評価している。家庭での親子の話し合いも「自分」「親」を再認識する機会となっているのであろう。

#### iv. 関係性のなかでの赤ちゃん理解

授業アンケートの観察記述をみると、生徒たちが赤ちゃんの発達や親子の関係性の発達をよく観察し理解を深めていく過程がわかる。例えば実践前には小さい、かわいい…と単純な形容詞でしか表せなかった赤ちゃんについて、1回目の授業後には“脳がこわれるからゆさぶらない” “ミルクだけじゃ赤ちゃんは育たない”などの感想がでる。首も座らない3ヶ月の赤ちゃんにはじめて出会った授業後の記述では、からだの細部や動きを好奇心いっぱいに表示し、また抱っこされると泣きやむ(89,3%)とほとんどの生徒が親子の関係に反応している。そして“泣き方が前とちがう” “いやなことを体であらわす”(5ヶ月)、“自分の方をみてくれた” “おもちゃを受けとってくれた” “親子で心が通じあっているなどおもった”(7ヶ月)、“赤ちゃんが泣いている時、お母さんがやさしそだった”(10ヶ月)…など、感情やコミュニケーション、親子関係の記述が増えてくる。

親子の情愛的関係が形成される過程にじかにふれ、生徒自信もまた赤ちゃんや親との関係性を築きながら人間理解を深

めている。インストラクターの援助や同じ親子を継続して観察できることが親子関係の発達への気づきを容易にしているとおもわれる。

v. 協力赤ちゃんと親にとって

2組とも母親の育休中の参加であった。初めだけ少し不安であったが“よかった、貴重な体験だった”“(生徒の)質問に答えると(親としての)自信がつく”“わが子がみんなに見守られている”という思いをもち終わるのが残念だったという。近隣に住む親子であるので、折角の関係を地域のなかで育てていく仕組みをつくるのがつぎの課題でもある。

vi. 日本での実践について

試行的な実践ではあったが、優れたプログラムであり、さまざまな効果が期待できることがわかった。しかし学習指導要領との整合性の困難さや、日本の文化に適合した内容の改定、インストラクター養成の問題等々があり、今後の取り組みに大きな課題がのこされた。

(3)日本での赤ちゃんプログラムの取り組みについて

赤ちゃんとの「ふれあい体験」は、日本にも数多くある。乳幼児健診や育児相談、赤ちゃん学級、子育てひろば、保育所、児童館・・・等々の中・高校生とのふれあい、保健師、保育士らによる学校での出前授業、最近では家庭科の授業で教室に赤ちゃんを招く・・・等々、地域の社会資源を利用したさまざまな活動が行なわれてきた。しかし、これらはカナダの赤ちゃんプログラムと異なりシステムティックに継続されていない。同じ一組の赤ちゃんを1年間という発想はなかった。2002年度、厚生労働省による「年長児童と赤ちゃんのふれあい事業」もはじまり、次世代の親育てという視点が明確に打ち出されてきた。地域の子育て支援のなかで赤ちゃんプログラムの取り組みもさらに増えてくることであろう。そこで、次世代の子育て力をつけるために、カナダのプログラムの基本理念や考え方をいか

したプログラムの提案をしたいとおもう。プログラムを作成する際に大切にしたい実践のあり方を、筆者らの理解であるが、以下にあげる。

①なぜ赤ちゃんと親子であるのか

- 乳児であること(3ヶ月頃から)
- 親子であること
- 継続参加ができること
- 近隣に住んでいること

一つの幼い命の成長発達するすがたに感動的にかかわれること、親と子が相互作用を通して情愛的な絆を形成していく過程にじかに触れながら、人間関係の原点である自分自身の親子関係を再体験する等、深い内面的な経験をするのである。「体験」の場だけでなく地域の中での交流に広げることができる。

②養育性を育む

- 自尊感情・自己肯定感
- 共感性・思いやり
- 命の大切さ・慈しみ
- 将来の親像(自己像)
- 基本的な発達知識
- 世話のしかた

養育性は他に関り育てる資質とすると、その基盤になるのは先ず自己尊厳や自己肯定感であり、他者の視点に立つことができる共感性である。内面の力が育つと世話行動という応用的な力もいきてくる。

③実践者が大切にしたいこと

- 赤ちゃんの安全・衛生面の配慮
- 協力家庭との信頼関係
- 感情に焦点をあてた働きかけ
- 「気づき」を促進させる働きかけ
- 参加生徒の主体性の尊重
- 実践者も大人モデルの一人

赤ちゃんはマグネティックな力をもっている。赤ちゃんを主役にすると、さまざまな地域の子育てプログラムが可能である。以上にあげた基本的な考え方を、プログラムのなかでいかせるとよい。鍵は「親子」「関係性」「継続性」である。条件が揃わない場合でも、イベント的に終わらないように環境設定を工夫するよ

### III 1.

#### 6) カナダから学ぶべきこと

##### (1) 根底にある人権意識

カナダは移民の国であり、多民族が共存するために必要であった多文化主義を掲げて、平等や差別をしないことに努力を続けてきた国である。それは互いの違いを認め合う人権主義へとつながっている。カナダの施策や社会、福祉の取り組みやさまざまなプログラムを見てみると、根底に共通して流れているのが人権意識であることに気づく。個人を大事にする、個別のニーズに応えようと努力する、それを市民と協働して実現していこうとする政府であり、社会であると思える。

まずは人間、人を大事にしようとする理念の下にいろいろな施策がある。人が生まれ、育つ場である家族を社会の根底にすえて、家族に必要なことを支援する、そうすれば家族は子どもを健康に育てていくだろうという家族への信頼がある。家族が機能しなくなったから、子どもを産まなくなったから、という言い方はしない。

親の力を信じてその力を尊重しようとする。誰も完璧ではないが、親は子どものためにベストを尽くそうとする人であるので、それを支援しようとする。基本的に親を信じる姿勢がある。「ノーバディズ・パーフェクト」の随所にその精神を読み取ることができる。

産んだのだから自分が、とくに母親が育てるのはあたりまえ、何不自由ない家族に、支援がいるはずはなかったこれまでとは様相が変わった現在、日本でも家族を支援する必要が生じてきた。その根底にカナダのような人権意識を据えてみたいものだ。

##### (2) 家族支援・親のエンパワメント

社会の基盤として家族を据えている。人間が生きる上で必須の感情的、経済的、物質的資源を供給し続けてきた家族が、その機能を維持できるように支援するこ

とで、さまざまな問題を予防することに力を注いでいる。子ども時代に1ドルかけることを惜しんで7ドル分も世話の焼ける大人にしないよう、今子どもを手厚く育てようとする、経済上の計算もしている。放っておけば危ない親たちにプログラムに参加してもらい、支えあうグループに育てる。親の力を認めて、自信を持って子どもを育てられるよう、必要な支援を欠かさない。

地域で支えあえる仲間を作って、問題発生を予防しようとする。当事者が本来持っている力を発揮し、仲間同士で支えあうシステムを作ってしまふ。当事者の力が生かされる支援策を学びたい。

##### (3) 父親支援

父親を支援することも、もちろん家族支援の一環である。カナダでは法律整備もあって父親の育児休暇取得が進み、ドロップインはじめ多くのグループがネットワークとして機能し、父親の子育てを支えている。それは地域をつなぐ役割を果たすことにもつながっている。父親の子育ては子どもによい影響を与え、母親にも潤いや安心感を与える。

日本の伝統的性別役割分業の考え方は、今もって男性・女性双方の意識を支配している。子どもは父親がいなくとも育つかのような構造を作ってきた経緯もある。今、子どもの状況は逼迫してきて、父親に育児への参入に頼まざるを得ない状況になってきた。父親の育児参加に対する支援は次世代育成支援策の、とくに企業の行動計画の中にも盛り込むべき重要な課題になってくると予想される。早晚多くの行政と企業が真剣に考え、この課題に取り組んでいくことに期待したい。

##### (4) ネットワークのあり方

日本でもネットワークという言葉が日常的に聞かれるようになった。子ども家庭支援においても、関係機関や人が連携を取りあって問題解決を図っていると聞くようにもなった。種々の委員会と称す

る会では、関係者が集められて主催者の趣旨説明や事業報告を受けることがある。集まった人たちは少しばかりの意見を述べるがそれで終わりである。この集まりをネットワークというのかどうか、ネットは組んだがワークつまり働いているとは言いがたい集合はたくさんある。

カナダの「知識ネットワーク・テンプレート」によれば、ネットワークとはまず何かの課題を解決するという目的があって、それを解決するために人を集める。効果的な結果を得るためにどんな人を集めるかを考え、目的達成のために貢献しそうな人たちを集めてネットを形成する。誰が何を担当して、その結果をどうつなげて効果を出していくか、具体的な行動計画を練って実行する。つまり絵に描いた餅、机上の空論ではなく、実質的にワークをすることに目標が置かれる。日本のネットワークもどきとはだいぶ様相が違うようだ。

次世代育成支援のための行動計画では、集まって計画を説明するだけでない、形だけの意見交換でない、このカナダ型の実効性のある実行型のネットワークができていくこと、それが社会の中で十分に機能し、子どもが育つ環境をつくり、大人も暮らしやすい社会へと変革していく実質的力となっていくような、真のネットワークが機能していくことを期待したい。

#### (5) 支援者の専門性と養成

カナダのファミリー・リソースセンターの多くは、心あるボランティア、それも女性が多い、によって設立され、半官半民のかたちで運営されて地域の家族に貢献してきている。設立した人たちは保育やソーシャルワーク、心理学等の専門性を持つ人たちが多く。その地にそのプログラムの必要性を感知した上で、自ら設立運営してきた核になるスタッフが、しっかりとひろばを支えている。

日本の支援者といわれる人たちの背景はさまざまある。公的機関であっても資格が問われないことも多く、非常勤やボ

ランティアであれば研修を義務づけられることもない。熱心な人たちが自己研鑽に励んでいるが、個人の自発性にまかされて、研修費も含めて結果が保障される可能性も薄い。

家族や子どもがさまざまな困難を抱えるようになった今、家族とそのニーズを理解し、適切な支援を行うためにはそれなりの専門性が求められるのではないかと。目に見えたりすぐには結果が出ない、正解はない子育てを支援する実務者としては、たえず学ぶ、研修を積むことが期待される。

またトロントの大学が、家族支援者養成コースを開設して、専門職としての人材を輩出しているが、ひろば等の需要が見込まれる日本の状況においては、今後新たな人材養成が求められることが予想される。その準備が必要な時期に来ているのではないかと考えている。

最後に、バンクーバーのファミリーブレースでコーディネーターを務める大庭みどり氏の提言を紹介しておく。

#### ファミリー・リソースに関する日本への提言

子どもが安心して楽しく遊べる場を作ること大切なことだ。それには乳幼児を保護している大人と子ども、学生が町づくりに参加し、自分達の必要なものを主張するべきである。公園などをつくる時、子ども達はその過程で会議に参加できなかった昔は、ニーズに合わない無駄なものを作ってしまったからだ。

ファミリー・リソース施設も、それを利用する人々のニーズに合っていないのではないので、子どもに関わる人に限らず、近所の老人ホームや学校なども、どのように参加したいか、皆の希望を確かめてから作るべきである。高齢者でもまだまだ社会に寄与するものを沢山もっているかもしれないし、小学生でも小さい子ども達の遊びを手伝ってあげるなから、自分の価値観を学ぶかもしれないからである。

こうして町全体のニーズを明らかにした後、そのニーズによってプログラムを作ることが望ましい。しかし、プログラムがしっかり出来上がってもそれに対応できるスタッフがいないでは、名目のみのプログラムになってしまう。スタッフの教育には大学が新しい分野を設けなければならないかも知れない。政府が良く理解し、援助をするべきと考える。

ファミリープレースの速やかな運営や、適したスタッフの教育にはお金がかかる。社会の人々がファミリープレースの重要性を理解できていないうちはなかなか政府から援助はしてもらえない。まずは日本の社会に、親子の絆をつくる大切さ、子どもの遊びの重要性、親がどうしたらもっと良い子育てが出来るか、子ども達を取り囲む社会環境がどれほど子どもの成長に大切な影響をするかなどを徐々に訴える必要があると思う。

カナダにはマザーグースというプログラムがある。これは、親子のふれあいを進めるために、子どもと親と一緒に体を揺らしながら親子の親密感を高める目的で出来たものである。プログラムの内容は、体の動作をつけるもの、たとえば「ゆりかごの歌」を歌いながら子どもを抱いて揺らす、手や指の動作をつける、ずいずいずいころばしのようなもの、お話の話し方「昔々あるところに・・・」などを親子に教えるものである。親子の親密感を一番大切としているので本を使ったり、指人形を使ったりすることは禁止されている。

このような、さまざまなニーズに応じている場がファミリープレースである。

ファミリープレースは町の人々全てに何らかの利益をもたらす、大きな町の家庭の様なものである。皆が助け合いながら将来の国民、健全な子ども達を育てあげる場所になって欲しいと願っている。

#### 参考文献・資料

①The Canadian Association of Toy Libraries and Parent Resource Centres

“Caring About Families” TLRC Canada, 1990

②Diana Ellis “finding our way” Canadian Association of Family Resource Programs, 1998

③Irene Kyle, Maureen Kellerman “Case Study of Canadian Family Resource Programs, Supporting Families, Children & Communities” Canadian Association of Family Resource Programs, 1998

④B.Beauregard, F.Brown “Supporting Fathers” Canadian Association of Family Resource Programs, 2000

⑤John Hoffman, Father Involvement Initiative / Ontario Network “Involved Fathers, A guide for Today’s Fathers” second edition, Commercial Press

⑥カナダ保健省 子ども家庭リソースセンター編 向田久美子訳『ノーバディズ・パーフェクト・シリーズ』ドメス出版 2002

⑦BC 家族会議 向田久美子訳『父親』ドメス出版 2002

⑧子ども家庭リソースセンター/こころのケア研究所編『ノーバディズ・パーフェクト活用の手引き』ドメス出版

⑨森山千尋「ノーバディズ・パーフェクトプログラムの理念を導入した親講座の実際ーふれあい子育て講座を実施してー」平成15年度近畿地区保健師研修会カタログ (Pat Fannon 提供)

\* FRP Canada ‘The Guiding Principles of Family Support’

\* Parent Resource- Family Resource Programmes Services, Collaborations, Partnerships

\* ‘Template for Knowledge Network Design Document’

ホームページ

\* Parent / Child Drop-in –Gateway to Family Development

<http://www.frpofbc.ca/page7.html>

\* BC COUNCIL for FAMILIES

<http://www.bccf.bc.ca>

### Ⅲ 2. アンケート調査およびヒアリング調査

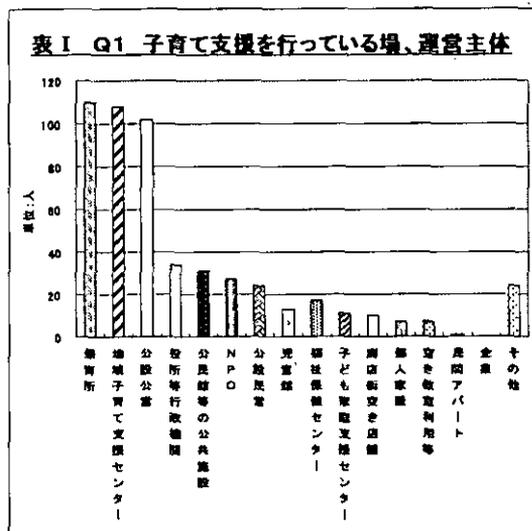
#### 1) 子育て支援者を対象としたアンケート調査

##### (1) アンケートについて

公立地域子育て支援センター36名、一般保育所71名、民間地域子育て支援センター73名、公設公営35名、公設民営11名、民設民営50名、子ども家庭支援センター9名、合計285名の支援者に対して、アンケート調査を行った。

##### ① 場所と運営主体（複数回答）

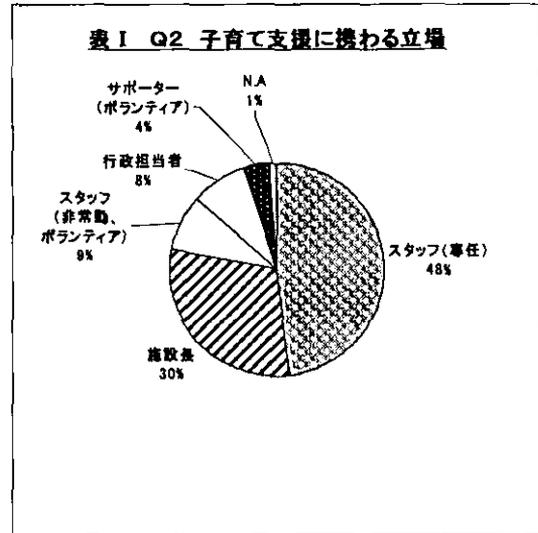
子育て支援を行っている場、もしくは運営主体（複数回答）について、「保育所」「地域子育て支援センター」「公設公営」の支援者が多く、次いで、「役所等行政機関」「公民館等の公共施設」「NPO」「公設民営」「福祉保健センター」「児童館」「子ども家庭支援センター」「商店街空き店舗」「個人家屋」「空き教室利用等」「民間アパート」が続く（表Ⅰ Q1参照）。



##### ② 立場

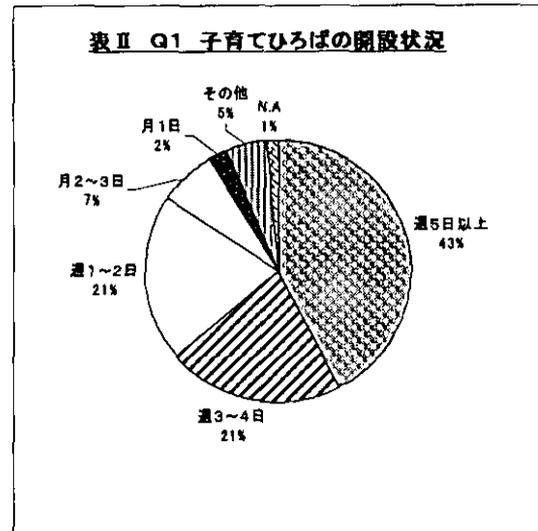
子育て支援に携わる立場については、半数近い支援者が「スタッフ（専任）」と最も多く、30%が「施設長」、次いで「スタッフ（非常勤・ボランティア）」「行政

担当者」「サポーター（ボランティア）」となる（表Ⅰ Q2参照）。



##### ③ 開設状況

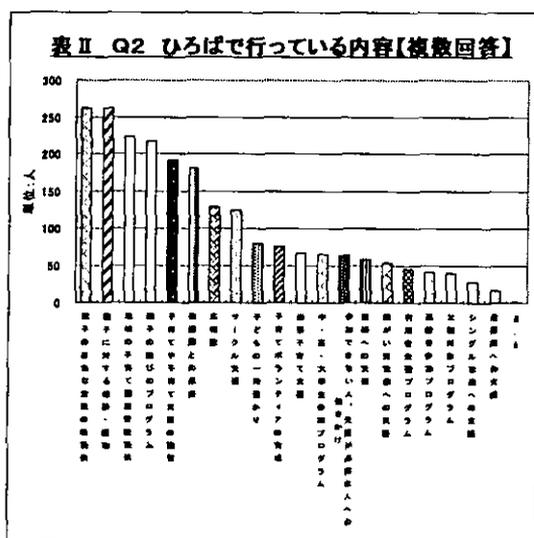
子育てひろばの開設状況は、「週5日以上」が43%程度と最も多く、次いで「週3～4日」「週1～2日」がそれぞれ21%となる。「月2～3日」「月1日」はそれぞれ7%と2%である（表Ⅱ Q1参照）。



##### ④ ひろばで行っている内容（複数回答）

ひろばの内容について、「親子の自由な交流の場の提供」と「親子に対する相談・援助」は、ほとんどの支援者が行っていると回答しており、続いて、「地域の子育

て関連情報提供」と「親子の遊びのプログラム」は8割程度のひろばが行っていると回答している。次いで、「子育てや子育て支援の講習」「他機関との連携」はそれぞれ65%程度、「広報誌」「サークル支援」はそれぞれ45%程度、「子どもの一時預かり」「子育てボランティアの育成」はそれぞれ30%弱、「出張子育て支援」「中・高・大学生参加プログラム」「参加できない人、支援が必要な人への働きかけ」はそれぞれ25%程度のところが行っている。その他、「妊婦への支援」21%、「障がい児家庭への支援」19%、「利用者企画プログラム」17%、「高齢者参加プログラム」16%、「父親対象プログラム」14%、「シングル家庭への支援」10%、「産褥期への支援」6%である(表Ⅱ Q2参照)。



その他、自由記述によって、ひろばで行っている支援活動について回答を求めたところ、以下のようなユニークな活動が見られた。

- ・出張保育（乳児健診児に待ち時間を利用して「ミニ保育」をおこなう）
- ・出張広場（乳幼児健診の時に、相談やおしゃべりコーナーを設けている）
- ・栄養指導と食育（離乳食の相談者に対して、保育園の食事の様子やきざみな

どをみてもらう。給食試食会)

- ・OB 会育児ひろば（先輩お母さんたちと自由に話して育児相談ができる）
- ・園の行事に参加。独自の行事（金魚すくい、すいかわり、ピクニック、カレーパーティ、バス旅行、クリスマス）
- ・サポート講座（ボランティアの育成コース）
- ・ファミリーサポートとの連携
- ・仕事と子育ての両立支援（講習会と情報提供）
- ・幼稚園との連携をはかり、幼稚園の体験入園
- ・子育てホームヘルプサービス事業（派遣のコーディネーター）
- ・部屋の壁面を利用してギャラリーとして利用している。母たちの作品展や地域の人の作品の展示。地域文化の伝承の場。

## (2)一時預かり・相互預かり

一時預かりの実施状況を探り、またその必要性について、そして一時預かりを行う上での課題とこれから新たに行う際に検討しなければならない課題について、自由記述による回答を求めた。

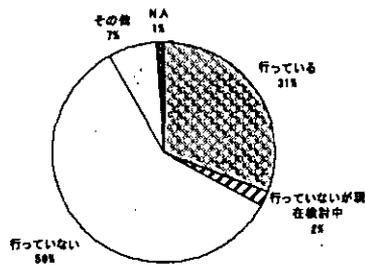
### ①一時預かりの実施状況について

一時預かりを「行っている」施設は、保育所グループ30.8%（表Ⅲ Q1-H参照）、ひろば関係グループ19.3%（表Ⅲ Q1-T参照）と、両グループ間に差が見られた。この結果から、保育所グループのほうが一時預かりを実施しやすい環境であることが考えられる。

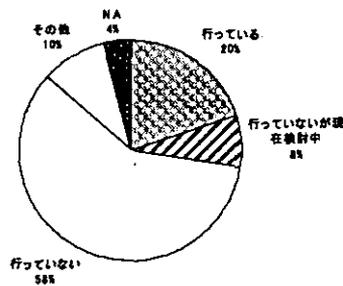
一時預かりを「行っていない」施設は、両グループ共に6割強を占めており、全体で見ても63.6%であった。

このうち、「検討中」である施設は4.5%にとどまった。

表Ⅲ Q1-H 子どもの一時預かり (Hグループ)



表Ⅲ Q1-T 子どもの一時預かり (Tグループ)



②一時預かりの必要性について

「必要である」とする意見と「必要ない」という両意見の回答があった。

「必要」とされる理由は、「親のリフレッシュのため」、「通院のため」、「上の子の行事のため」、「葬儀など子どもを連れて行けない場合のため」、などがあげられる。「転勤族が多く預け先がない」、核家族が多く「祖父母と離れて暮らしているため頼れない」、「祖父母が就労しているため頼れない」、などの現代ならではの事情も影響しているようである。

また、「利用者からの問い合わせが多い」ことから、親のニーズからも必要性が感じられているようだ。

「必要ない」とする回答も比較的多かった。その理由は、地域の他の施設で一時保育を実施していたり、ファミリー・サポートを紹介するなど、周辺地域で預かり機能が充実していることでニーズが満たされているから。よって必要ないと考えられているようである。

また、ひろばで仲良くなった親同士が互いに子どもを預け、預かり合う姿も見られている。講座の間の保育をこのような「相互預かり」という形で行っている施設もあった。互いに預かり合うことによって、我が子以外の子に目を向け、いろんな子どもを知る機会になっているようだ。

一時預かりは「必要ない」とする意見の中には、緊急の場合以外の理由で一時預かりをすることは、「親の育児離れ」を助長するのではないかと、「地域の助け合いの機会を失う」のではないかと懸念する意見もあった。

③一時預かりを行う上での課題

・保育所グループの課題

保育所グループでは、まず、保育室や人員、費用（園側の負担、親側の負担）などが課題としてあげられた。公立園では制度も壁になっているようだ。

保育室については、保育園児と同室で預かり保育を行うのかそれとも別室で行うのかで意見が分かれるが、基本的に同室で行うとしても、園児の保育の妨げになってしまうなどケースによっては別室が必要となることがあるため、一時預かり専用の保育室を設けたほうがよい。

その他、一時的な保育であるため「子どもの体質を把握しにくい」ことや、給食に関して、「費用」の設定や「アレルギーの問題」について等が課題となっていることがわかった。

・ひろば関係グループの課題

ひろば関係グループでは、次のような課題があげられた。

ひろばを利用する際、基本的に親子で